誹諧古今句鑑

冬

へ 5
1190
4

誹諧古今句鑑　冬之部

立冬

眼ハ見えて冬ハ立ぬ雲ほうら　意朔

冬そ来ぬ陰子ハ雨の乾法師　羅人

小春　小六月

昼中ハ一時ハ小春の南　理然

何を拾ふ春は小春は日の朧万之
夢の小学子入る小爽かな百童
不二見せて日ハ入る亀小六月宝馬
蔵見て抑き乱れ小春立乙外
定めなき紅葉や小蕉の色雖月
夕立ふるや木の葉は小六月丸室

神の旅　神の留守

陸奥国ふ卜立也神堂月其角

旅衣今やはじめの籟は神　呉朝
落葉してさなすのうら廣し神の留守　佐国
胡風小造酒をめぐる神は　旅　市仙

時雨

足たゆき紅葉や時雨の先走り　貞徳
一雨ふる又ふりそそぐ日和哉　霧沾
初しぐれ猿も小蓑をほしけり　芭蕉
大地の性ゆるたをれ引潮春

雪のねもかいたくろひぬ初時雨　去来
きくともなしかおほるる時雨ゆゑ　丶
小夜しぐれ蘆の白ハ捲やみぬ　野坡
ちよ時雨蘆へ這入傘の岩　嵐蘭
たくるとや思ふたむ京の袁物屋　北枝
千鳥ふ入日染りくしぐれ来山
時雨ふるとも思ふなるハ何ぞ　才麿
頃日の恒乃結めやたしく　野坡
あまきけと時雨する垂の袖声　也角
食堂ふ者時雨ふるしぐれ　支考

耳かゆく耳ふ抜きゆき時雨ふ　一晶
時雨ふりまれ皆ふなへ酒の　烏撤士
池の星又きらくと時雨ふ　北枝
其某の湯殿買をむ初しぐれ　乙由
たくるとや抜て移なき小松原　心祇
何人の庚を坐所小夜しぐれ　蓮之
三日月乃玉ふよりまれ時雨　希因
ぬくや時雨ふ中の洗ひ馬　洛く
蝙燭の考える言なるなり小夜時雨　春来
去思ひ降ぬたくれのロ乃星ち丶

荒やむ八風も少くなる一しきれ　羅人
雨降るに雨足ぬ日なし神なみ　京
賣り石のこもうたる初時雨　移竹
たゞ時雨小春の炙を涼うけぬ　蒼狐
しらぬ杉や川を渡るこゝの橋　佐保丸
さくらやちるまに散る松一木　梅郎
松風や時雨よ乾く　濡佛
風の怒りやすむ小春しきれ　貞知
新日の祝儀をとゝや時雨ぬ　貞川
月花の静る比やきりたるきれ　公曳

いそぐ八時む時雨の迅れ傘　其葉
ちるに日小弧うふるやうしきれ　絶亮
松風八時雨を洗ふしきれる　呉言
時雨ふる野川や水の足え傳き　吐鳳
さくらや萱蓑かけし時の古　孤舟
湯上りの旅籠うろや初しきれ　孤舟
描も膝小年さて小荻時雨　笠詠
ちるに降るさられや風の礼きて　百桂
木の葉ふれ禁の里や山時雨
山寺や長れ時雨の九ひと日　群長

常ふろむ　浩茶　乳も夕ぐれ　沾凉

志くれまれ　秋やあれもの月うき　佐國

金屏よ　扉て　吉野しや　小夜　霰　何来

月と　今ふ　竹雨も　又ふ　富士の　裾　宝馬

野　詠　乱て　山　月　ふる　時雨　うれ　洋宙

旅行

やとまつられ　月　いうる　ぬと　時雨　梅翁

遊女西賛

所よ　書　年　ぬう　ぬよ　小夜　時雨　田室

眺望

志くれや　氣比の　清堂　海おし　蒼狐

しぐれや　雲の　陽午　の安房上総　玉圃

炉開　炉口切

口切ふ　塊の　座ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　き　芭蕉

炉ろな　や　顔ふ　かけ　る　公　面　月下

口切や　ぬ　ぬ　ぬ　内　義　ぬ　小　ぬ　紀　春来

口きりや　ふ　ぬ　室　ぬ　ぬ　鯉　清泉

口切や　き　ぬ　ぬ　ハ　ぬ　ふ　ハ　ぬ　公曳

炉の炭のひとつとて猟嫌や肘まくら　枝静
炉ゑゝきや古な客ふり亭主ふり　蛙壱
炉冠や蝋三つ二つ　なゝき　釜乙　外
口切や袋ぬゝとも引ぬ　小春　義

玄猪

鬱るゝぬゝの子かゝとや祝ふら　存義
住ゝとや閑もぬゝの子ぬ　月花　蛙壱

達摩忌

達摩忌や皆ゝまれて弥小花　万立
達磨忌や痺小花　我　悟　小知

十夜

爺婆の京小手多き十夜かな　乙由
一夜ゝ十夜八さゆる月夜かな　蓑狐
花やう小沁ゝ沙ゆる十夜うな　宝馬

入相の人や呼らん　十夜　孤雀舟

帰花

世の中ハ絶て桜やかへ花　孤也
みよしの山や余ほの春かとゝ　千代尼
春ゝらめ雲やむらふかゝり巻　左篇
浪山木や花来なくも帰　孤雀舟
ちる中ハ咲てそむもとち　枝葉
楊貴妃賛

花梨の伊ゝ〻やかゝ垂ル　竹武雄　雄縣

寒梅　室咲

室の門ハ咲やこの花　冬〻　鶏　春郎
冬〻の梅雀来　嘯　夕日と　涼山
麹ハそ花の加減やむろ桃　芦英
寒梅や年ゝ〻くこのハ雪の兄　寛之
寒梅やハ〻ふりく花の猪　木丹
室梅ハ雪ゆる寒さや　旭　彩　松架

山茶花

山茶花や小雨小庵の落日哉　梅寿

山茶花や不乃末なるらん寂みとハ　吐風

さゝんくや挿ハ思ひ醫栗ハ洗ひ　祖徳

茶花

茶の花や蝶の羽ぬけ朦うさ　殘留

むさけと淋しきと茶の花哀れ　山蜨

宇治ハ今茶の花園と色粘ぬ　窓舟

水仙

水仙や白き蕾子ハ少しうつむき　芭蕉

這ゝる虫一つ形し　水仙花　伊賀半殘

水仙や雪ハ志ゝゝれハ歌の中　心祖

水仙や葉一本ゝ花の賢　春来

水仙ハ名ハ〳〵たゝゝ笠之亀　ちよ尼

いけるとき水仙主を盆の上　蒼狐

あ仙や口和の石くゝ　偶春郊
水仙や千種の中ふ花の武士　笠齋
すいせんや薬ゝも名あるけなるゝ　太布
あさんや花垣ふ古き足の法木丹
水仙ハ雪ゝ切割くく又ゆ沾涼

宝菊

宝菊や小猿のかゝる白ゝ　芭蕉
宝菊や雪ハ垂けとも去盛り　伯翰

宝菊や古葉衣をはとひ咲ゆ亀

麦蒔　麦の二葉

麦蒔や一うねハ又むふ風乙由
宝ゝをうかゝふ麦の二葉ゆ乙外

大根引

ほゝくゝと息ゝ白ゝ大根引　路艸

壹山を腹ふ詰らと　大根ひき　蒼狐

大根引うしろへあまるかげゝ

兵ものよ云くとこらへる土大根千外

百姓の居合腰引大根引卜人

地と人のカらゝゝ卜　大根引毒水

木枯

木がらしの果ゝ者ゝ多ゝ由の吉　言水

こゝゝ卜仲ゝと言き山のき逢　安角

風小二日の月北吹　ちゝ　乾　為兮

こがゝゝの一日吹て居りかゝ　凉菟

嵐木ゝゝゝく豆の葉ゝ幸　子英

出がゝゝ卜大津八町　年乃庭　旧宗

木がゝゝ卜猶祥琴て松　そのう　左簾

こうらし卜京ふ梅る野とおもハれ　蝶夢

大このゝゝ卜柳ふ與のさめる声　松架

風のふく卜吹井の田安乃　脛　雪高

こがゝゝれ力卜侍きて蕎　墨　教我

木がゝゝ卜木ゝふ咲吉蕎き吉　田機

落葉　冬木立

おもひなし木のなかに散る葉の数　沾徳
かゝひらる三井の二王や冬木立　其角
冬木立いらめしや山の骨もまひ　仙化
ふる西川やこの葉ハ焚き出れ岡　惟然
山川ふ風のかけ色　落葉の那　蒼柳
落葉焚く家や淺黄に夕くふ　〃
皆ちりて打ぬ牛の指のなゴ　渭北
仙人の乳もやつ迄　落葉ハ　涼山

伎時ふおの迄と落葉この葉ハ　素芳
神垣ふ根香一木乃おち葉ハ　素竹
年月もふるゆく屋根のおのゑハ　井風
けふ稲落葉も風乃八重ひとく　笠新
藪垣ふ流ふや落葉の裏まかゑ　芝水
楽書も荒に社地の落葉ハ　仙里
門の戸乃涼くもなる落葉ハ　群長
山乃井の乳もかゝちもおち葉ハ　孤舟
落葉して或日ふりぬうしろ迄　存義
あゝハ也今ハ古城乃冬木立　玉圃

ある寺にて

百年の京父を意の蔦葉らか芭蕉

即身成佛

果ハ皆佛の道ふ蔦葉このな蓮之

枯野 艸枯

我丈ふ面くものなき枯野哉不角

るるハ萱蔦てあれ枯世哉子世

川筋のまをくし曲る枯野ふ岩泉

いろ〳〵の菓一父ふ枯ゑ〳〵ゆ柳水

吹さらす旭大き〳〵枯野哉宗瑞

淋しさや枯世と馬の親子連荼狐

蔵るち〳〵淋しきものを枯葎心祇

枯々ゆな野中の石ハ黒きを佐保九

的の背ゆ夕日ふ言し枯世哉梁山

川幅の砂ふ成ゆく枯野哉梅寿

枯世哉夕日ふ通すなれ家花菱

川ふ枯ふ雁や冬陣の菓哉其礼

世ハ枯て寂士のさうと成ゆ色百桂

枯野路やいつこ泊りの夕暮　群長

遠方の居り所なし枯野哉　一紅

山居の隠士を憐む

枯藪何ふまいと侘な世や五粱

水涸

冬川や筏乃居る草の系其角

あかきて言れや鵜の添ちら平砂

氷るべき方さへ絶し冬田哉　左藻

水鳥　鴨　鴛鴦

鴨の脚ハなうれもあへぬまみち哉　梅翁

鴨停や沼を離れて茅一詰　子蛍

淀舟や裏ハ塗切池乃鴨　富堂

鴨哉ふやがしくれて妻の身春来

足る事よ千尋ぬ上も鴨乃足　蓼孤

水多や入れ来てこそ夫婦はゝゝ

白くも五羽鴨と見えし星明り

鴨しさくうき鳧や池の磐代中　梁山
水多よ方ハ泡くるめ游きふ足吐風
を多や初羽ゐ水のなやゝ
ゐ多や鳧教ハ足えぬ朝機　嫌素盈
持亞すは和も寄しー鴨のたや存義
ゐ鳥や水かきくの田乃捶根蓼雨
水多や多ふ淪をかく朝は和玉圃
を多やゐみち粉ふ川高きゝ
水多のうき祢漣ふやゆのうね百往
古池ふかちらぬ中や磐蕃ひト人

世不陣や池の水多岸ふ足拡　素人
岸陰ふよるや昼とも深鳧鳥　木丹

秋中

ふて鳧る方の不性さよ彼の鴨　野坡

龍安寺にて

を多も訓てこめらし京の水　雀舟

千鳥

波風ハたてと千よし　衣ゐとち　貞室

昼の内酔ふ眠るに　千鳥うるさし　素堂

星凪の間をうよとや啼ふ多　芭蕉

荒磯やはるるる訓るる友ちとも　去来

啼つなる渦ふ巻き浦千鳥　氷花

蓬戸ふ砂の吉信　小夜ちとに貞佐

云ふるふ舟出に吐や川ふ多　春国

啼て来く来くて啼や村衛　柳居

淋しさハ数ふるよるぬふ多　古祇徳

干かるこしてふ多啼　大井川　葵狐

松ふ翳る帆ふ指遠ふちとに　武栗堂

並松や月ふ染越のむらふ　吳仙

日ふよるる波英しや　桐ふ多　東道

月しろや波の浅瀬ふ　衛井風

埋ミ失も耳出せ蛙　社ふ多　柳臺

入月ふ皆ちとに千多ふ引　常路

夜堀くむ浦や松風村ちとも　遊橋

淀鳥羽や舟ふ絶宮　北川千鳥　素與

懐旧

かろへてハ見ぬを啼や友ちとに　乙由

綱代

惠心寺に奉公ハせて綱代守　支考

風引ぬ人のゐころや綱代も　古　紀逸

古捨し綱代乃床やかゝ虫利　亀文

あるゝも愛いむまふとあるゝ　雀舟

見なゝとゝ子と使ふ先綱代守　在情

鮟鱇

鮟鱇や板の間までの富士太鼓　白雲

鮟鱇の体眼乞ひ　滋乃　吉和水

あんかうや先龍の昇る水京色　百萬

河豚

なゝ〳〵は又須日や蚊くと汁　白匂

あゝ何とゝもなきみゝハゝて鮟汁　芭蕉

秋炮の夫と書くや河豚汁　其角

ゝと切ていよく悟し鮟の面

鮟汁や答ぬたゝ子とふゑ子け　加賀　一洞

ふく汁や一疎入して藪　生兎士

鮟汁ふ誠の衣や禍うゝと春来

肥さ月を色むやふゑの蔦衣　万立

来さんどみ夫物中こ河　脈汁　桒水

旅やうれものとゑて来けふくけ　蒼狐

河豚けやちらて更行　荻北雪　春郭

ふゑ答よてさけ山ろ彩ぬ九森ふ　貞知

人ハ武士くハめも強しこ河　脈汁　吐風

玉の緒よたくるハ多ゑね鮟め味　北平

鮟捲て子ハ寄ゆまする　情さ　ず　存義

河豚さげて心と人ふかく生ゑ　石菴

鮟汁ふ戸の泊ふあ足恋の月　遊舟

ぬく汁ふ向ふ礼義　や大　胡坐　窪郎

生海鼠

生なうゝゑ心とけふおる生海鼠　ず　芭蕉

大きゝと今ふ寄さも掴のるまこ　ず　万古

恵比須講　誓文拂

先調と学と立々と恵比須講　史邦
兼小事ハ町人小なれ共ひとを講　貞佐
賣買小ちる名十月廿日　仲旧　室
ゑ祝の立従ハなし　恵比須かう　心雅
朝ハ魚の富貴なるもの恵比須講　呉龍
商人の今銭月の出ものや羽子ひを　素芳
かゝる月空誓文の法秘せむ　五蓮

冬　日　冬夜

枯世ー詠ー雪ゑ名なるん冬の雨　芭蕉
待めさいふつけても家ー京ハ山　鬼貫
賜のゐる中中乃枕よかゝ月　嵐雪
浪乃風枯ーさ名　冬ハ山　水花
手の徒夜奥乃犬　夜ハ叫ふがコ　赤
夜々明る灯も盗ゝ　ゐめ出ー　梅郊
冬枯中眼小ゝゐる　ゝの仲の丹　春郊
悟るゝ夜アハ寒ゝ　峯乃松　玉圃

冬月

一葉ちるいくらも寄て月夜かな　荒雪

社頃の夢　振ひくる月ぞ〳〵　庶堂

庶の影出て宅きき月夜かな　洒堂

淺漬の大根洗ふ月夜かな　俊似

重宮つら月さすさゆる杉の重　野棠

月夜くもるや時雨の仁科　梅郎

少〳〵ら月よも雲の乱くもる　春郎

落きそうていよくさゆる月夜かな　公曳

落葉して心寂〳〵月夜うれし　素雅

大夜中や雲ひえ初る月の老　津宜

未〳〵しけ蕨ひとうるき月夜かな　宝馬

搖ちの戸も思ふもむ雲れ月乙外

雲ハ雲と思まさる月や野の夢　寅得

相抑お月て打まむ月夜かな　常仙

寒

青月の雲ふかれゆく宅うな　鬼貫

葱白く洗ひとる宝一の方芭蕉
陸鯛の歯くきも宝一魚の右丶
盃明かふりむけくき宝一の方去来
乃摺小多賀の居の宝ず尚白
明家小湾子かけ出る宝一の形桂之
奥座のたれぬ宝きさやはの者歌川
宝ゑれハ寿ゑまくゑ寂ねハ花宝し支考
皂角子の鞘ゆりゑし古屋春可生
日と清て魚荷の通る宝一の形雅郎
水涸て柳ゑしゑきさむけたゑの方呉仙

沖浪て苦なき風の宝一の方寂弁
むさゝ地かロの入語花宝ず山蟹
盃乃ゑるゑのに宝れ宝れ素人

冬 籠

金屏の松乃古ひや冬ニ十九芭蕉
冬古ゑ乃又嵩宝ハむけ花丶
大根とゆ味方あ足ふゆ籠蓮之
矢屏風の尖ちて宝一冬籠古紀逸

兼好もしぬ世のなやみ冬籠木丹
さくやゆ火鉢一揃冬ごもり　鯉雄
冬籠世しも淡し砂の方　雖月

春暖をはてぬ羽ふ痩節を引むすぶ
降とまちきまるを松の冬こもり　淡く

辞世の句せちゝとそゝおこきゝ人へ
老木として枯るなり梅の冬籠心　祖

埋火　火桶　楷

火桶抱て腮脇とかゝゝ　古路通
埋火ふ年ゝる　徐の　ちいさ　ちよ　寥和
寄添ふやひとり一柴の　初火桶　左簾
抱て知き親の遠アの　初火をけ　常路
楷の火ふ寄るや　古木北老ゝ　腸　百桂
前うしろ　アやや火桶の　提ゝる　存義
楷梵や春ふハ大るゝ山の　むく　花盞
六莖
埋火や灰ふ　なるをおもふ　事　笠砂

火燵

行住坐臥猫のまろや亟火燵　芭蕉
ぬくしめや巨燵まてゝの陸奥　春澄
いつとなく我が定る火燵うち　字先
うきく涙やさ絶て巨燵の山うつゝ　花雪
邪ゝて蛮燵や火燵の切不沽　涼

西賛

笥井角面に合る古きつゞら　亀文

炭

白炭や焼ぬむしろの豆の枝　忠知
炭焼のひとりをあるゝ竈の除　其角
炭かはや寒ハおきうれの餐よのゝ　素芹
炭竈や木を伐るとの山續き　玉圃

蒲團　衾

蒲團為て屏きる蕊や東　山嵐雪

仏半も麻ハをなるる　貴　合衣　小春
四布五布　ゑのかくれ家のぬとんか　存義
親　とゝの咲　わらく蒲　雪ゝか　青芝
子や焙るゑも保れ家の伊達蒲　雪　宝馬

紙衣

言もなし香もなし年とふれる衣　可著
敝よ又敝とかさるし　貧　衣か　亀文
紙衣俤小言も雪さのゝゝめか　吳言

老の波立居小裂るかゝゝ子ゝな　左簾
紙衣着て描小油ゝ小もゝゝぬ夜や　笠祢
齢百小備る人ゝ達て
形衣着て若やく祝ひ羽ゝの乱　寂郎

頭巾

丈は達ゝる形巾やさます夜の義　如春
遊るれハ形と形す投ひ巾　沾徳
巾ゝゝ耳ゝ出すや夜の寒　野坡

山里や蹴出すき人もなし　京　魏水

いろくの蹴出は星やたれ蹴出　蓮之

よい言を実てもとるよ投蹴出　清泉

年なれや人もゆるして金蹴出　貞川

世の年よ角なる蹴出きん　北平

西一さのむう人は角蹴出　雲風

蹴出なる夜ハ長いりや長さう　玉園

西賛

京信ゥまかたころあ至た蹴出　雀郎

霜

月ふるひもう刈程寒し霜なら　京　永定

霜の羽川棟の実の出さうな　杜園

被ゐハ差いと石里　夜ハ　霜　三の　閑幽

初霜や茶園蓋系相ほうけ　野坡

さつ霜やうかひとし麻の足ゝ

投物の鼻息荒き　霜　夜ハ　春来

初霜や岩ふ不動の瓜さは　蓋　栄仲

初霜や鳥居の笠木岩の角　雅郊

出淡〻雲のふる井の朔を新舟
まゝ起ぬ家の気れや屋根の雪　室馬
朔雲や屋ハかたとも格好蓋伴富
あさやふ雲〻日和の雲はら芝水
枯行や野ハ茅薙の霜の初寂郎
彩天ふ大さゝ雲くしも夜ふ何夏
月と地ふ重雲白く敷そのぬ亀洞
撲雲や米飯ちゝむ麦の雲素月
望籠の戸〻上ゝる格の霜芭波

辞世

霜月やなるハなき効の新法師　忠知

鐘馗賛

世の蓑を袴る雲の釵ふ旧室

羇旅

拉て知ま云ま雲お夜の柄伺春来

師翁旧室五十日の法莚ふ人〻会ゐ〻仕りて

公りくいさむや雲の〻ゆゝる　祝蒼狐

新宅

新〻や雲ふ掌聖の庭樹ま素后

雪

ふるのゝ気一夜ふり出来る雪の山　貞徳

烟ふき煙けぶる白し〳〵富士の雪　徳元

むら〳〵雪さらるゝ不尽の山

何とゝてもとかと思き物もなし

悩ゝ〳〵ぬ物哉や雪の庭　男幽山

岩角もむつゝとなるや雪の俤　〃

姫松の椎子雪や伊豆の島　〃

いさ〳〵ハ雪見ふさろぬ不まて　芭蕉

馬とさく雨る雪の旦の那〻

恋〳〵といへやたくや雪の門去来

九重ふ足訓ぬ雪ハ夢さかい

つゝ雪白と鹽の雪ゝ　〃

雪ゝ白出蔦る木葉　仲才麿

たつ雪や先厩ゝきえ初る　許六

雪の中や蔦やう墨るうつしぬ　猿雖

陣雪ふ松大きうろ不尽の山　智月

初雪や芝やしゝ世ハ判宮　〃　秋色

暖や井戸の雪ふ神のあと　〃　詞

初雪や赤子ふたさを抱朝其角

雪の日や紙屋後の新の色　丶

氏賀や雪降るさを俳園吟

物陰の降ぬも雪はひとつかな松芳

ちらくと炭も吹いつのむこかな一通

かさなるや雪ノ山ノ山ノ山加生

ほろ〳〵と雪てこハされもせし雪仏一井

雪ぬるや杉ハ杉るて雪なるら聖坡

玉簾雪ちく〳〵朝の谷るへし蓬志

なつ雪やこ〻ぬれて仕ふ笹の雪木因

初雪や先苔屐ふて蓬まて路通

笠の戸や夜の雪ふ我と雪ぬ客丈艸

降も山も雪ふとちれて何もかも丶

雪ふ戸先の休めハ旨やきむ孤衾

這入さいふや雪の庄折戸柳吹

下るふさへ雪ぬはくぬ也雪の人青峨

初雪や袖笠なとハ人ふ影起彼

なつ雪や彼の屋ふ岩ノ上淺く

雪ぬの蔦ふ岩や谷の雪ふ光

半分ハ江戸のもちこ富士ぬ雪古立志

初雪や多賀小路の木くの新　春来

たけ雪や桂木車の途中より　旧室

炭しさも偽りもなく雪の泉　心祇

初雪やせめて卯木の似せ花　〃

なつかしやきみ起ひし東山　乾什

酒屋を兵ひとり夜の雪　宋阿

初雪や我孤しき傘は下米　仲

そば雪や稲の古株ふりて蔡　柳

初雪や除月近く十二月　〃

積るか日本橋ふる雪の雪　〃

ちらし雪や眼小路へうなし川向ひ　〃

富士をうつしるハ雪のかおい　〃

雪こうし素子ら首と成よ急　〃

背くしくらと戸さしても雪の花ぶす　栗堂

いほ法の夜解ひらん松の雪　〃

起あてし老の叶夜や庭の雪　〃

入相や雪のたつ巷　家次　末梅郊

孟紀の淋し　〃　鳥も雪の朔　〃

拈残る人目なくしく雪見舟　亀文

捨舟やそてもたて横雪　〃

物雪やたつまのいなる山おろし　貞知

雲より似く仰ぬ御堂の望い

何ゝ侍も見張を雪はさうがい

初雪やトル比寄葉なる　京の左雅郊

雪をれて一節いゝやゝ竹のふし　涼山

をつ雪や故郷の文書をゆ心寛　羅

ふる雪や鞍馬一諸　川通ヒ

ゝ雪や色つれて落る滝の懐素　羅

初ゆきや　都の不二の　ゝきハ　龍昇

眼をとつと石戸きゝむやけさの雪　花城

初雪やおのゝ〳〵乃ゝ梨子　地　沈亮

友ほと来る坪小行くは水雪　曳尾

雪元や荒て思ふ銀閣寺　北平

降雪の枝ゝ古くむやちるも　頃翁

初雪ゝゝく月ハ　なき也　吐鳳

大佛の俊なお彩や　ゆの恵百萬

雲一木夜乃初雪　宝と先ぬ　笠齋

ゝ雪や伊王塚ても山乃物宝馬

降雪や公理ゝ　てなき　菴津富

夜半の雪明ゝは雪と　秋方

武蔵野の雪や足もとめむ陰もなし　素人

箭と見と落とさるつ峯の雪　祖徳

雪の日や竹の孤の静こうろ　羽貫

足て笑へ雪に羽森を　竹の芦　皓

初雪や空に見えて消こと　素涼

寄りと読ふや雪の　朝　柱芝水

薄川小野の毛高の中雪　拾水

たれ雪や旭の邪方小なる　素角

初雪に晴ゆく路の　蓑い

乙雪やかゆい不へ子の面き　蒼雨

雪に末こ我　弟こ　風情こうる　乙　外

寄こ雪や花の外　の山　孤　舟

大佛雪や　邪　き小　笹　京　十　教

言絶こく　孫の雪とかこ夜の毛　素山

寄こ雪や月小　めるまし　新　如　雷

初雪や夜柴小たも　杉葉こる　雀　舟

夜の雪石灯籠ハ　さび　や　遊　搭

盛り　行　籠小雪　の　花　婆　石

雪の日や　れ　波治の　失　さ　沾　涼

降かくせ雪小　嵐の　牛　筆　鯉　弥

雪一面振はけい我足の跡　雀郎

ゆきそ〻ぐ下戸なる人仕去男　何来

畑の雪大根の葉丈せ小〻ぐ　軽舟

信章江戸〻ゆ登り来る〻小

いや見せ一不尽を見と眼小日校の雪　季吟

立能細

初雪や内小居さ〻れ人ハ誰其角

許六〻竹の西小鼠し

叶君のおもゝい袋雪もぬ主　兎士

舟中

指形小雪のホロと見せ〻〻〻　沾峩

雪後

ち〻雪や晴て月の〻夜に　その百童

吹雪

峩吹雪淺くや牛の反ち〻み　芝水

旅僧をとめて

なる〻ほど〻梅さ〻〻炭松〻雪　雀郎

妻小疑〻〻人と答へて

衣白髪をとゞめと雪ゆきの松一巴

霞

霞ふる春や初食の出来る色　畫好

たゝくと子ハ肌ふくく霞一の奇　秋色

雪ふる雨ふる色陣まする　霞ハ千外

ひら〳〵雲ふ空ちと通す　霞れ　雲風

霧

いらゝ沼春や雲ハ拵木笠　芭蕉

むら〳〵せやハ不尽の雲ハこけ　不尽角

きよ〳〵として霧ふらゝや麻の角　支考

さゝ〳〵と萩も氷をあゝれ　ハ史邦

萱葺やたゝら雲の降とも星　呉朝

泛きはしる和のをれあるを　ハ梅寿

地よ蔦〳〵春ゝ霧ふ分　市仙

氷柱

吹晴て尖る形の佳らゝ　玉圃

大滝のとつまと咎る法らく　芋洋宮

氷

ゝとゝ人れハ夜を染ぬるや初氷　心雅
夜ア や雨明て樓の糸ハ　お寛羅
朝鳥氷の上と歩行けア素羅
残ぬめ階や小春の蔕　水婆百
月小徒砌も昆弱も氷る　重やム雑
残月やあらゝと出るくたつ　お雪高

氷とる温ゝの智の童ア　この邪玉園
お けア地小次しき雨ほの月孤舟
水ひとをおるや川の縁白亀
凍る夜や飯と書へき祝まて雑口

神迎

松ゆき雪も清めや神むゝへ　栗堂
松のつゝ糸も張バーや　林亟　曳尾

冬至

日八牛ふたかへらそ冬至むすの羅人
表の芽や冬至の日脚一分二分五厘
冬もそや梅ふ交れ日脚一寸南宝馬

新足世

新そせや此二丁町　明乃妻宋阿
茶屋くも新足世新や軒の玄心詩

新そせやくのそろけかつ足花沾峩
かふ足世や稀袋ふ灯そ嚴雪百萬
新足をや星そ奴清法見物杜谷
点足せや一番太鼓　二さし　鶴老鼠

髮　立　袴着

髮立や俗ふ生る子ハ先つ足えに蔡孤
かみ立や戌黄昏巾の供　男春郊
そ多点や父ふ似初るうしろ附　呉夕

神楽　播州　利重

少きゝ如敬そ妙也神く楽

夜神乎や鼻息白な面の内其角

古きよそよるゝ教や神く乎素玉

美神乎や庭燎ふゝ重る杉の丈津窩

報恩講

平等ふゝ世る檜やお素月梅翁

肩衣や後の世かけてお素月　大坂　旨恕

翌ゝ如老の力なれやお素越范字

花地流の唱へ初ゝむ傳風素雅

助ゝ後世や付世ふ情石越操舟

鉢扣

言ゝ也曉かけて神ゝく　平野　宗静

入うゝ年ゝの入ゝ神叩嵐雪

其古き鮎夢ふ足せよ神叩公来

瓢簞小酒八入れぬ衣裁たて　轍士
夫婦さき歯ぬけ　多なる裁　叩　芦賣
人うをふいろり　彼さき裁〻　紀兎士
駕籠よけよ朱雀の富と裁　敬　洋富
公とて八兵ぬ安や裁　角　家　宝馬

宝の入

鼻の先はまんても知宝を入　吐　鳳
大きへ笑ひくるや梅のてな　芦　英

寒念佛

何の事ぞ撞木八細し宝念佛　文　考
寒きを星ふるふて宝念仏　心　祇
土佐節の雲の男や寒念佛　石　絲
芝の口千住ぬ八つや宝祢ふ　百　萬
宝念仏いふ浮世八うしの吋　如　雷
夏ぬくや訓保の祇ぬ宝念仏　風　舎

宴寄

時島寄きへうし　宴の中貞德
宴寄や皆女房を拾ぬ人遊也
宴声や九ちゝ人乃　不幸佐
寒寄のロれ中を月夜式百萬

煤掃

年なゝや夏かさゝて煤ゝひ　友静

煤ゝ入さるものを卒け　拭風
煤ゝ寺八目出ゝ佛りか　不卜
ゝ掃や嵐近こむ黄揚の中　殘香
煤ゝ卒ゝ囲炉祀ふくゝる庵かゝ　李由
何方か行て遊ハむ煤ゝひ　挙白
大墨の日なゝ不こゝ煤ゝ　拂乙由
叶日ゝゝ徒かゝむ煤ゝ　宗陽
煤ゝゝて夕昏ひとゝ　静也　荼孤
萩とこめて煤ゝゝ時代の城下町　寛雅
煤竹やゝゝゝとゝ又宴の月　左簾

燥とりて皆こうくこそきや　拉　不言
もゝさきや藝ふまゝ紙合羽　雀郎
燥て紀の芋き柿子や丸き　李克
さゝもとと夜ハ明ゝ兎　燥　拂　鐘下

佛　各

佛各ふ雪や一丁井のかつけ　仙子　安成
うき春ふ勇めて到き佛　佛各　九宝

餅　搗

餅花や糸もてぬけく　玉　抑　大坂　助　音
もち搗や丸揚ぬ陽ぬ　春　蒼　狐
餅ぬきゆてんるふ湯来れ玉まろめ　把　菓

年　忘

令さゝ洗濯せ世ゝ　孔　野　坡
年忘き箕垣ゝて　兎　京　升　亭

發ふ耳あ〳〵八引出せ年忘迄　亀文
浮世やゝとゝて年を忘貝　丶
年とるれさきや老ぬ茶酒　素玉

節季い

糸もくや節季いゆる夕ひす字先
節季いふ胡仮くやく成ゝ魚宗瑞
節季いの己と急く拍子ふ紀亮

混合

女房巻用むや素のうら後迄　風虎
やもかくそなるてや雪の枯尾花　てせ城
今世又肥迄きと　藁くひ不門
惜まれてなかるる人冬の蝿　雪角
今八世城れくき冬や冬の蝿　且藁
陽婆とハおもい思て孤の猫　寸吟
医うろ乃青森　松やせ寿　両呉夕
空ゝ白て暑る　蟬の　水五連

降るふるめ雨や待る花八る　花菱
殘る日や蔦紅葉の森小芋　一木一巴
庵令講八佛小花のちくゝ式　曳尾
餘一の谷引揚る演ゝ人の墨　北平
石藤さくや加蓮きる水沛　風舎
あゝめて友と攻さむ鶉卵　酒李克
亭匠の風据とめ月ゝ　松操舟
咲きゝぬ世の望花や主　接し外
子行公丁子沢も新ふ世　や貫太
心斗指小汐滿まゝや苣菜　清吞鳥

旧室悼

水沛や扎のうへ小咲ゝめかゝ　蔡狐
行脚せゝころ

猟八や山路吹ゝ　九合　羽涼帝

冬　雜

水ゝと乎ゝ　平家蟹

生海鼠ゝもなゝて流石小平家也　涼菴

老てハ只世をやもく雨しめるとあり

生ハ去まりの雲全所　巾梅郎

市中

初雲の沙法や頃日葱　苔笠歌

年内立春

よこしなよ師走の内ハ花の爽心雅

年の内ハ春ハ来ぬ雨の雲雅郎

ゆく年内ハ去まち月の夕アガ　左簾

節分

豆とまめの中なる笑ひが其角

月花の果や桜ハ赤いこと　柳居

つくゝぼふ種植の声や厄　後羅人

行と去る年やたゝえむ除疫の酒　雀舟

邯鄲の枕まぬまなるゝ　私　厄言

病後

今年るハ孤りカや年の豆　素芳

歳暮

かへせくわのとしなら八年の春　李吟
恐ろしや女の眼遠ざけ蓋　信徳
暦ふを皺ハたるとなり年のくれ　一時軒
花雪や夫と居して夫と待　鬼貫
大三十日定めなき世の定めぞ　西窪
行とよ京とてとなるハ　狀　ぶとん　湖春
旅部屋の夕日静けし年の暮　其角
山伏の足袋ふ出さるる師走ぞ　荒壁

年の夜や人ふ子足の十三夕　玄来
待若め聳ハもなるとを年のくれ　李由
雪も今周しふるとと師走ぞ　休甫
差なく大晦日の森洒の外　蚊足
春まりや花を梅ふて咲とまと　所坡
いねくとくといきれつ年のくき　古行通
渦蓋のけぶくさよ年ぞ暮　孤屋
行年ぞ師走ふ成て情ひ　也　蒼狐
年の市ふりや佐ふ角カ石ハ

ア帰マ古紀月夜の大三十日　蒼狐
なつうき月の栖や大こうろ　移竹
伸を聲を師走の中小尺送るぬ　梅郊
行とし況を夜はよの池次　栗堂
ゆく年は新ゆるめを雪の傘
翌年る今年やふうと惜こ附
庚寅の日新伸うと言の冬　雅郊
年の夜や禁欠のうりる鶏の新　寛蘿
とい来は誰もまり也年は言　吐鳳
行とは蔵長新や金沢巾　花城

月あるうは空は雨まむ大三十日　公曳
市人小年惜ひ新はなると危
雪の内小春は来よ危かさと杭　沾峩
年末負ふて休むやむつのむ孩　左簾
まるふ由く年もぬると乃　妾津富
迎も行とうをおもと師走大
不二の雪ちけもやうて年言ぬ　雀丹
提燈小迫く年も行歩小
物言や人とて春というむ　玉圃
行とを迫ゆく梅乃きかひが　芭波

大朕ハ古也〔一〕年ハ冬角カ煮大
一日の大事日ハハや年ハ何来
師走家と立ちむるや酒の泡平砂
弱ハ嗜年ハ冥ちるいくや今笠齋
梅柳解ハ立春ハ今来てそ存義
自悔
子ともとハ学ハハ立年の岩其角
永代橋上
帆はらや師走の精の天ハ迄梅郊
誹諧古今句鑑　冬之部終

附錄

冬之部

一陽井素外

うハとなる空ハ小春ハなるぬ花啓
風雲ハ袖ちくれ初時雨
庶る笹ハ人皆祢ハ小菊付る
かゝ下戸と表れとおもへ久しく社
初ものや炉ハ次炭の白ひと
炉たて小六月なる十夜ハ

水仙や掃除行きて庭をし
ろ仙や朽葉ふ染まぬ公を元
蓑蕉や畔ふ物ふふ里の犬
古一の〳〵やや〳〵火消てる月夜
風や夫ち〳〵砂ふ〳〵か茂河原
こが〳〵し此農ふ立む護法神
ホ〳〵や雨も枯きる月の色
淡し枯ハ日和ふ猿る落葉ふ
むく鳥の一ち序風の木ふ葉ふか
山の井ふ炎ち紅伝ふ朽葉ふ

小雨して旅人を紀枯野哉
野ハ枯や世川の魚ハ庭ふ沈
冬枯や水と此ゆくロハ久ア
麻ちぬを南ふく荻の鴨ふ色
暖や千鳥一む巻海の息
仮附やなち八巻出る網代ち
夕昏ふ重ふ角あ荻寒〳〵ふ
新宅ふうり重の宅ふ
命ふ命深山ふ冬ふと至

母も妻を欲しがる富や冬の蕊
夕道々の淋しく老ぬふる蕊
搗焚や雪乃下ゑを人の国
まるはしく蒲雪か点れあてまり
胎内ふ我をやとせる姿とん子の胡
暖ハ云とくふ家をし雪れ花
粥口ふまこゝの苦や霜の胡
角くむや苦ノ枯をて雪そら
雪ふりや座花の富貴ハ古とし藁
ちらほし雪の降され不見の山

大雪や大うそ月の夜アれ室
降雪や六の地蕊れ袖大と
積る雪の雪ものいそて後夜
雪の雪や原ちろ五人ゑてをす
朔雪涵やかけ行雑の雪ふる
老ふゝと失桶ためて雪の朔
かんくと月夜と鳴らす氷れ
砌風や塔の氷れ石かハら
日も梅をいくた洗ふを玉糸
舞姫とまハす夫ゑ里神楽

春をまて人か眼ハなし　梅花

独木岳ハいかに煉とゝ小紫垣

俳徒きやまゝ重ねもき　女釈

ちゝ重や年も漕ゆく永の秋

現ゝも師走かゝちや爭の数

蓋し冠年も惰まて若さうと

眼ハ人ふゝやゆ冬この　古暦

撞かハまていかハこと蓋の陸

師走十五日蓋のゝ久ふ

福ハ内いつく冬鬼の叫　月夜

知るゝハほゝきと晋子もいつゝ
むすめのゝをもゝれゝやゝゝて

春まゝや養ふゝゝか花の父母

送別

返盃とまゝむ旅路か雪の酒

落髪せゝ人ゝゝ句を乞れて

阪中冬ゝる比か別とハれ　奇特や

師終焉の時

てや氷泮む一ぎ冬を拾ひ　浩

全瓦居とゝのせゝ日釈の分まれるか

第一めゝる冬ハ氷ゝてなゝゝとハ

雪中遊與

指出さハ庫鰞や蕣む　井の雪

禁庭殘菊

明殘る星を雲井の冬の菊

寄冬祝言

君の代ハちゝにたゝるを松法冬

附録冬之部終

跋

廣韵ハ鑑ハ鏡也又照なり誠也とゝ我　師
玉池乃翁得るの明鏡ハ古今社句と照し
なせ門生社中ハ敷誠とす大意ハ自叙委し
支ら中ハ親疎の事なりと初学乃為寄ハ社句を
挙む親句といふ親も　花とゝ花ちるのくと
赤陰　宗謐　疎句といふ遠ハ　えびや神代法
事ちおそくゝ　守武　ことく詞の親きと疎き
との譬也ねやの一のきハ按書と命す集中ハ
師の句なり其由縁とゝハ此集ちといふ形る

人の撰ぶべき仏さて増補せまらおこの業なるか
俳小巳の句を撰ぶべき事乃あるんやもおもふ
義を語るものハ芭蕉師の句を準縄とせハ古人例
をも引て是もしれとうけむるさうとて洩さむも
亦我志ふかきハ少しこころ耳庭かとまるる歟
筆しあつめ再ひ少しとぶらとて附録とす
芭蕉師の稿小なるを撰ふあるけるを事を
安永丁酉夏常末丹葛飾乃生白菴乃て書

東都書林申椒堂 日本橋北室町二丁目 須原屋市兵衛藏板

俳諧明題集	烏伯子撰	五冊	片歌 清水浜臣 二冊
芭蕉桐の一葉	二冊	同	茶竹そり道 は 一冊
其角雜談集	二冊	同	舊宜集 は 一冊
同	越谷吾山作	二冊	牙文要語 は 一冊
硯乃苔	紀逸輯	二冊	は一書ふり は 一冊
思多山	東園白扇老	二冊	寒葉齋畫譜 は 五冊

根なし草 風来山人著 五冊
水乃ゆくえ 東作著 五冊
志道軒傳 右同作 五冊
俳諧不斷橋 高点の句 全
左傳屬事 南陽先生撰 廿二冊
大明十三省圖
萬國一器界圖 二枚
龍門先生文集 二編 三冊
歷代事跡圖 大清呂君翰訂正 一枚
大疑録 貝原先生著 二冊
大清廣輿之圖 水戸赤水長先生著 全十枚
物類稱呼 越谷吾山作 五冊
唐吉今胎華之圖 同 十枚
陸賈新語 蘭嵐先生校著 一冊
六體千字文 崑陸先生書 一冊

王元美尺牘 一冊
書柬式 春臺先生閲 小宮山先生著 三冊
増補地名箋 一冊
字畫淵海筆法之書 二冊
春秋指掌圖 一
訓譯示蒙 徂來先生 二冊
江毛雜話 森島中良著 五冊
寂惚先生文集 一冊
生花千筋樣 入江玉齋 五冊
小説士平傳 一冊
古言梯 馬麦撰 一冊
笑府 一冊
百人一首解 栗本氏 一冊
唐明詩鍵 一冊

文乃志濃り 古和文の法帖	八冊	大東地名考	一冊
ちりつく料理集	一冊	詩學小成	四冊
民間備荒錄	二冊	文章法帖 杉花夢	二冊
信濃地名考 長沢務山	三冊	常盤帖 同	二冊
七觀音經	全	癒治茶談 津田玄仙著	全
唐摹真草十七帖	全	同 二編 同作	全
廣澤樂詩帖	全	外科撮要 青木編蒯子述	二冊

解體新書 杉田玄伯著	五冊	俳諧繪卷ものがたり 谷素外作	二冊
同 約圖 同布	五枚	俳諧繪卷詞德秋	二冊
文章小成 雲南先生作	六冊	繪卷いろは歌 春信筆	三冊
頓悟詩傳	六冊	繪卷遊乃時 北尾重政筆	三冊
詩學楷梯 東里先生輯	四冊	諸名所方角集 谷素外輯	二冊
歐陽詢千字文 戚鴻堂法帖翻刻	一冊	大成年代廣記	一
會席料理帳	一冊	今日歌集 堅雲樓之狂哥集	一

古今句鑑 谷素外撰 四冊

文子 三冊

西京雜記 二冊

四聲韻選 雲閣千葉先生 二冊

荆楚歲時記 全

瀧本三代帖 三冊

古五絶 西野先生輯校 六冊

翻譯萬國圖 桂川甫周校

幼科種痘方 一冊

統諧類句辯 谷素外撰 二冊

詩家法語 西野先生作 全

胞衣柏子千句 同作 全

つまくり鉄槌 四冊

宗周発句集 同作 二冊

一陽井著述目録

誹諧繪本 世都孔登起 全部三冊

誹諧名所方角集 全部二冊

誹諧古今句鑑 全部四冊

誹諧神釈行事解 近刻

東都書林 西村源六 須原屋市兵衛